

論文の概要及び審査結果の要旨

氏名	宮本 直美
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	甲第 33 号
学位授与の要件	大阪総合保育大学学位規程第 13 条
学位授与の日付	令和 6 年 3 月 17 日
学位論文題目	架け橋期における文字の読みの研究 ——ひらがな読みに関わる認知能力を中心に——
論文審査委員	
主査	小椋 たみ子（大阪総合保育大学特任教授・博士（文学））
副査	清田岳臣（大阪総合保育大学准教授・博士（医学））
副査	高橋 登（大阪教育大学教授・博士（教育学））

〔1〕 論文の概要

本論文では、幼児における文字の読みを育む取り組み、幼児期の教育と小学校教育との段差などの問題意識に基づき、ひらがな読みに関わる幼児期の様相についての実態を把握し、幼児期のひらがな一文字読みに関わる認知能力を明らかにしたうえで、諸外国におけるリテラシーへつなぐ幼児の文字の習得へのアプローチ方法を参考としながら、就学時期における読みのレディネスについて検討することを目的とした。

本論文の構成と、その内容は以下のとおりである。

第 1 章では、読みに関わる認知能力と、読みに困難のある幼児児童の先行研究事例から示される読みに関わる認知能力について考察した。日本語話者の年長児から小学校低学年における架け橋期の読みに関わる認知能力に、音韻処理、ワーキングメモリ、視覚認知、語彙、自動化が関わるとの仮説を設定した。

第 2 章では、年長児から小学校 1 年生までの子どもに対し、第 1 章で仮定した読みに関わる認知能力を測定する課題を作成し、年長 2 か月（年長 6 月）と年長 11 か月（年長 3 月）、小学校 1 年生 7 月に調査を行い、ひらがなの習得と読みに関わる認知能力との関連について重回帰分析とパス解析により明らかにした。

年長児のひらがな読みは個人差が大きいものの、年長 2 か月で、多くの年長児は、ほぼ清音を読み、濁音半濁音の読みを学んでいると考えられる。読みに関わる認知能力としては、清音、濁音半濁音、特殊音節の習得全てに自動化と聴覚的短期記憶を伴う音韻意識（逆唱）が関連し、濁音半濁音の習得には、図形の同異を弁別する視覚認知が関わることを示唆された。年長 11 か月は、ひらがな清濁音をほぼ習得し習熟していくとともに、特殊音節を習得し、ひらがな清音・濁音半濁音・特殊音節に関与する認知能力は各々異なるが、自動化と音韻意識は関連しながら、年長児の読みに関与すると考えられた。この時期は、既知の文字種の習得の方がひらがな文字の習得により関与し、特殊音節の習得には、

清濁音の習得と読みに関わる認知能力とが複合的に影響することを明らかにした。小学校 1 年生 7 月の時期は、濁音半濁音と特殊音節の習得と習熟が進み、読み流暢群と読み困難群の 2 群を比較すると、特殊音節の習得に差が認められたことから、特殊音節を未習得な児童は読みに困難を抱えている可能性がある」と推察される。全体的には、読みに関わる認知能力は、年長 11 か月は自動化と聴覚的短期記憶を伴う音韻意識に、小学校 1 年生 7 月の時期は音韻を分解抽出する音韻意識に差が見られた。しかし、一人ひとり読みに関わる認知能力の程度は異なり、読みの様相も一人ひとり異なることから、一人ひとりの読みの状態に応じたきめ細やかな支援を早期から行うことが重要であるとしている。

第 3 章では、幼児の文字に対する興味関心の程度、読みに関わる認知能力、ひらがな文字の習得との関連について示した。文字に対する興味関心はひらがな文字の習得と弱い関係があった。一方、文字に対する興味関心と読みに関わる認知能力には関連が見られなかったことから、文字に対する興味関心と読みに関わる認知能力とは異なるベクトルとしてひらがな文字の習得に作用している可能性があるとしている。

第 4 章では、幼稚園教員が捉える、幼児の読み困難に対する認識について示した。幼稚園教員は読みの困難を、「『文字』についての関心がない」、「発語がない・言葉の理解が年齢不相応」、「ひらがな文字を読むことが出来ない」「集中力がない」「外国にルーツのある幼児」の 5 つの観点から予測しており、読みに関わる認知能力の観点については確認できなかった。読みに何らかの困難が予測される幼児の就学に際しては、保育者と小学校教員とが読みに関わる認知能力の観点をも含めた共通の観点から幼児の読みの実態を把握するなどし、何らかの困難が予測される幼児については、継続した個別最適な支援を幼児教育施設から引継ぐことが重要であり、それは文字に対する学びにおける幼保小の円滑な接続につながるとしている。

第 5 章では、第 1 章から第 4 章で明らかにしたことを基に、年長児クラスにおいて読みのレディネスを育む実践を行い、就学時期の読みのレディネスについて検討した。幼児期は遊びを通して学ぶ時期であり、文字の習得を前提とはせず、主体的で協働的な学びの中で、文字に対する学びが深まっていく。幼児期の教育においては、幼児の興味関心の高い事物を取り入れ、多様な発達段階に応じた用具を工夫し、一人ひとりが遊びに没頭できる環境を整備するとともに、個別に必要な支援を行うことも大切である。主体的で協働的な学びという意味において、小学校教育が幼児期の教育に学ぶところは大きいとしている。

終章では、本研究の結果から、就学時期の読みのレディネスとしての 1 つの指標として、年長の時期に自分の名前を一文字一文字読むことができるのか、音韻を分解抽出できるのか、単語の逆唱ができるのかについて、園での生活や遊びを通して継続的に見守ることが重要であるとした。見守る中で、何らかの支援が必要と判断された場合は、個に応じた必要な支援を行い、小学校へ引き継ぐことは、小学校生活における子どものウェルビーイングにとって重要である。幼児教育施設において音韻意識を含む文字の感覚を十分に育むことは、小学校教育における文字指導への滑らかな接続を可能とする。この文字に対す

る感覚を具体的に示し、幼保小において一貫して育む力としてカリキュラムの中に明確に位置づけることにより、架け橋期の文字の学びにおける滑らかな接続を為すことができるとしている。

なお、本論文のもとになった研究は、以下の学術雑誌や学会で発表し、本論文の執筆に際し加筆修正を加えた。なお、第2章、第4章、第5章は申請者が第一著者である共著のため、共著者からの本博士論文所収への許諾書が提出されている。

【序章】 未発表

【第1章】

宮本直美．（2021a）．文献レビューによる読み困難のメカニズムと幼児・児童にみられる特徴．大阪総合保育大学紀要．15，9-23．（外部査読有）

【第2章】

宮本直美．（2021b）．年長児におけるひらがな読みの習得と読みに関する認知能力との関連．日本教育心理学会第63回総会発表論文集，PB001．（外部査読無）

宮本直美．（2022a）．年長児におけるひらがな特殊音節の習得と読みに関わる認知機能との関連．日本教育心理学会第64回総会発表論文集，PA008．（外部査読無）

宮本直美・大内田裕・今枝史雄・澤ひとみ．（2022b）．年長児におけるひらがな読みの習得と読みに関する認知機能の発達——進級直後と就学直前との比較から——日本LD学会第31回大会発表．P7．（外部査読無）

宮本直美・大内田裕・今枝史雄・澤ひとみ，（2024）年長児のひらがな清濁音と読みに関する認知機能との関連．日本発達心理学会第35回大会．（投稿済み）．（外部査読無）

【第3章】

宮本直美．（2022c）．文字や読みに対する興味・関心と読みに関する認知能力及び習得度との関連：年長児保護者への質問紙調査から．大阪千代田短期大学紀要．51，1-16．（外部査読無）

【第4章】

宮本直美・今枝史雄．（2020）．幼稚園における「読み」に困難のある幼児の実態：公立・私立園への調査の比較を通して．日本乳幼児教育・保育者養成研究．1，35-46．（外部査読有）

宮本直美．（2021c）．「読み」に困難のある子どもの幼児期の特徴についての一考察：一支援者の困難に対する気づきから．大阪千代田短期大学紀要．50，42-54．（外部査読無）

【第5章】

宮本直美・佐藤留美．（2023）．架け橋期における遊びを通した文字に関わる活動についての研究：年長児クラスでの音韻意識に関わる実践．大阪千代田短期大学紀要，52，

29- 45. (外部査読無)

【終章】未発表

また、本研究の一部は科学研究費基盤(C) 研究代表者 宮本直美, 研究課題／領域番号 21K02695 研究期間 2021-2023 年「幼児に対する個別最適化した学びにつなぐ『読み』のスクリーニングシステムの構築」の助成をうけている。

〔2〕 審査結果の要旨

大阪総合保育大学課程博士審査基準に添い、本研究の評価を述べていく。

第一の研究の集大成については、論者は小学校教諭として 25 年間、担任及び通級指導担当者として、読みの困難な児童への支援に取り組んできた。また、特別支援教育コーディネーターとして、特別な教育的支援を要する子どもの就学支援も行ってきた。その経験から、年長児から小学校 1 年生のいわゆる架け橋期における読みの円滑な接続の重要性を感じ、文献研究、質問紙調査、年長児への検査から幼児期のひらがな読み関わる認知能力を明らかにした。また、本研究から得られた結果に基づき、年長児に音韻意識を育む実践プログラムを考案し、幼稚園担任に提供し、実践したことは評価に値する。

第二の独創性については、幼稚園教育要領等解説では、文字に関わる感覚を豊かにすることが、小学校における学習の生きた基盤であるとしている。本研究は、この文字に関わる感覚が何であるかについて、読みの認知能力の側面から検討し、年長児において、音韻意識等の音韻を処理する能力がひらがな読みにかかわる感覚の 1 つであると仮定し、研究した。さらに、先行研究では、清音と濁音半濁音をまとめて 71 文字とし、文字種ごとの認知能力について検討してこなかったが、本研究では、ひらがな読みの「清音」「濁音半濁音」「特殊音節」には、各々異なる認知能力が関わること、年長児期の文字の習得には音韻意識が強く関連し、自動化や文字の形を識別する視覚認知も関連することを明らかにした。また、年長児の文字の感覚を育むため、音韻意識を取り入れた幼稚園でのクラスでの実践や、就学直前の読みに困難が予測される年長児を対象にして、就学を意識した文字の感覚を育むための実践を行った。

なお、本論文の根幹となっているひらがな読みに関わる認知能力の解明を試みた第 2 章は、共著での学会発表しかなされていないことなど、評価が難しい点もある。

第三の研究領域の水準の引き上げについては、幼児教育の文字に関わる教育内容を実証的に検討し、幼稚園教育要領に記載されている「文字に関わる感覚を豊かにする」の内容の 1 つが音韻意識であることを示し、具体的な実践内容を提供した。このようなエビデンスに基づく客観的な研究結果から保育内容を考案する方法論は、幼児教育の研究領域の水準の引き上げに寄与するであろう。また、本研究で見出された知見は、年長児から小学校

への架け橋期のカリキュラム作成に生かすことができ、教育課程論の研究分野の水準の引き上げに貢献するであろう。

第四の学際性については、発達心理学、教育心理学の方法論に基づき、ひらがな読みに関わる認知能力を明らかにし、保育現場における音韻意識を育むための保育実践を行った本論文は、保育、幼児教育、特別支援教育、Dyslexia についての小児神経医学やリハビリテーション医学の分野の研究にも寄与し、学際的な研究である。

第五の本学大学院が授与する博士（教育学）の学位にふさわしいと認められることについては、本研究は架け橋期におけるひらがな読みに関わる認知能力を明らかにし、実践プログラムを幼児教育現場に提供したことは幼児教育学への大きな寄与となる。よって、本学大学院が授与する博士（教育学）の学位にふさわしいと考える。

以下に、博士学位請求論文公開審査会において審査委員により出された主な質問を記載する。

1. 論者が本研究の前提においた二重経路モデルは英語圏と異なり、表記と音との対応関係が規則的な日本語の場合、子どもたちのつまずきにどの様に対応するのか、あるいは子どもたちの読みの過程を理解する上で、どれほどの役に立つモデルになるのか。このモデルをあえて前提に置いたことの是非を聞かせていただきたい。
2. 文献のレビューで、読み能力に関わっている要因として、音韻意識、ワーキングメモリ、視覚認知、語彙、自動化、眼球運動などと整理しているが、これらは同レベルの「認知能力」と言えるのだろうか。
3. 自動化とは、認知を介する随意的な作業が、大脳皮質を介することなく、より比較的下位の中枢により自動的に制御されることであると考えられる。図や文字の認知処理の速度と呼称のアウトプットの両方が反映されるため、認知能力として取り扱うことに問題はないか。
4. 幼稚園教育要領に記載されている「文字に関わる感覚」について、読みの認知能力の側面から検討しているが、感覚を認知能力に置き換えてよいのか。
5. ひらがな読みの研究だけでは申請者の研究の原点である小学校就学時点での「読み」の困難へのアプローチとしては弱い。研究のターゲットをひらがな読みだけでなくより広げ、深める必要がある。

6. 日本語と英語では標記の違いがあって、それが保育政策に影響している。英語圏では、スキルとしてきちんと押さえていく必要があることから、それに応じた政策になっているが、日本はそうっていないのではないか。表記の問題やつまずきの深刻さの問題も視野にいれたとき、日本ではどういう形での支援が考えられるべきなのか、海外の動向や海外の読みの支援を視野に入れた上で、日本の研究やご自身の研究を位置付けていただきたい。
7. 2章の研究計画の基本的な認識についての問題点やまとめかたなどについての質問やコメントがあった。

以上、博士学位請求論文公開審査会において審査委員により出された質問に的確に回答をした。

よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいものと論文審査委員全員一致で判断した。